

『日中間説話の比較研究』

繁原 央

る。現地の鄧敏文、呉定国両氏と通訳の曹咏梅氏の協力による百話ほどの採集調査の中から、民間説話の背景となった民俗に注目した論文で、先の四篇の論文と同じく、立石氏の民間説話に対する研究方法がよくわかるすぐれた論考である。

一、本書の構成

日本の民間説話を東アジア、ひいては世界の説話との比較研究ができる条件が整いつつある今日、日中の四篇の説話を民間説話に焦点を据えて比較考察した労作が刊行された。

二〇〇五年に國學院大學に提出された学位論文に、実際に中国貴州省の少数民族トン族の昔話調査をもとに考察した二本の論考をあわせて一冊にしたものである。論文審査に関係し、トン族の昔話調査にも同行した者として、紹介を兼ねた評を記すこととする。

本書の中心となる論考は第一章「猿の生き肝」、第二章「鼠の嫁入り」、第三章「古

屋の漏り」、第四章「小鳥前生譚」である。

学位論文でもあるこれら四篇の動物昔話の研究は個々の研究史を踏まえ、周辺諸国への目配りもしつつ、精緻な資料収集のもと、比較考察をしている。しかも、巻末に資料編を付し、中国の民間故事を日本語に訳して示している（「猿の生き肝」二七話、「鼠の嫁入り」二八話、「古屋の漏り」五話、「小鳥前生譚」一五話）、近年における中国で出版された資料が見事な訳によって読むことができる。論文に引用した資料をこのようにわかりやすい訳文にしてくれたのは、ありがたい。

論考の「第五章 中国貴州省でのフィールドワーク」と、「第六章 日本の山姥と中国の変婆」についての考察は、トン族や苗族の民間故事調査に付随したものであ

これら六章の前に「序章 本書の目的」として、簡単なながら著者の立論の立場を明確なものにしており、後に「終章」を配して、今後の展望と民間説話の「生命力」と伝承者の想いを記し、まとめとしている。生命力とは「猿の生き肝」では騙す場面であり、「鼠の嫁入り」は循環形式の話であり、「古屋の漏り」では勘違いからおきる騒動が不変で、ここに生命力の根幹があるとする。以下、この結論に至る道筋を読み解いてゆく。

二、文献資料への目配り

前半の第一章から第三章までの「猿の生き肝」「鼠の嫁入り」「古屋の漏り」は、インドを源とした昔話であり、中国を経由し

て、文献だけでなく口承で日本に伝播した側面を持ち、伝播の方向性が見えやすい話だとする。インドを源流とすることは文献資料があるからで、まずはその確認をしている。「猿の生き肝」では『ジャータカ』『パンチャタントラ』から中国の仏典、日本の『今昔物語集』『沙石集』をあげ、「鼠の嫁入り」でも『パンチャタントラ』から中国の『応諧録』などをあげる。「古屋の漏り」については『パンチャタントラ』にも触れるが、大島建彦氏の「昔話とことわざ

―古屋の漏りを中心に―と小林恭子氏の「中国民話『漏(古屋の漏り)』をめぐって」という二論文を踏まえて論じている。

ちなみに、二〇一三年一〇月一九日に白百合女子大学において、「杵物語」をめぐってという題で本会の第六五回研究例会が開かれたが、そこで西村正身氏が「『シンドバード物語』について」と題して発表され、「猿の生き肝」(一一五 猿と兎)と「古屋の漏り」(一一四 猿)の類話があることを指摘された。これらの説話が『パンチャタントラ』以外の文献にも記

載されていて、幅広い人気のある話だということを知り興味深かったが、このことは文献の精査が、民間説話の歴史的考察に不可欠だということの意味していよう。立石氏はそのことを心得ていて、文献資料への目配りも怠っていないし、その立論の基礎にしていることは全論考で研究史に触れていることから伺える。

次の第四章の「小鳥前生譚」は一つの話型でないこともあり、文献をたどりにくいが、人が死んで小鳥になったというモチーフでくれば、中国の『華陽国志』『杜宇』の話にさかのぼることができ、それらの文献については明記されていて、研究史を踏まえて考察しており、配慮がうかがえる。

第五章と第六章は貴州省でのフィールドワークをもとにしているの、ことさら文献資料を使つてはいない。

三、口承による伝播

本書は文献資料による説話の比較を中心にしたものではない。書承による説話の

伝播を問題にするのではなく、日本と中国の民間に口承されている説話を丹念に収集し、精緻な比較を通して、民間説話が人と人との交流のなかではぐくまれてきたということを証明しようとしたものである。

日本の昔話は『日本昔話大成』『日本昔話通観』などにより、分類整理されているが、立石氏はさらに直接その元となった各報告書にまであたっている。また中国の民間故事は戦前の林蘭やエバーハルトなどの資料はあえて使わず、一九八〇年代以降の『中国民間故事集成』を主に使っている。その理由にはふれていないが氏の見解がありそうである。

第一章の「猿の生き肝」は、日本における口承説話を北海道から沖縄まで一四五話集め、一覧表にし、今昔や沙石集などの文献と一致するのは二話にすぎないことを指摘し、口承の説話が文献から離れ独自の展開を示していることを明らかにする。一方、中国の口承説話の二七話を内容から「内陸部の山地形」(一一話)「沿海部の山地形」(二話)「内陸部の海洋型」(九話)

「沿海部の海洋型」(六話)の四種類に分けて比較し、そのうちの「沿海部の海洋型」が日本で口承される「猿の生き肝」と一致するという。「沿海部の海洋型」の六話は広東、浙江、上海、吉林などの省のもので、資料は必ずしも多くないが、するどい指摘と思われる。

第二章の「鼠の嫁入り」の日本の口承は青森から沖繩までの五二例を示し、循環形式のものを一一例あげる。中国のものは二二例あげ、他に「県官画虎」という笑話が関連する話として六例あげてある。これらを表にして比較し、日本のものにインドの『パンチャタントラ』と類似する話が一例あることを指摘し、それが中国の海南省などに二例の類話があるとしつつも、類話が少ないとして慎重に結論を保留している。確かに「鼠の嫁入り」が中国の年画などで広く行われていることを考えると、民間故事の報告が少ないといわざるを得ないので、この判断は正しく、さらなる調査収集が待たれるところである。

第三章の「古屋の漏り」は大島建彦氏の

論文に詳細な研究があるので、日本の類話については省略している。その代りインドの類話を三例紹介し、「その分布状況や詳細は依然としてはつきりしない」「インドにおける昔話採集が進んでいない点に原因がある」(一一七頁)というが、インドの昔話採集が進んでいないというのは資料として使えるだけの口頭伝承の採集がないということだろうか。インドのモチーフィンデックスとして、Stith Thompson and Jonas Balys の the Oral Tales of India が一九五八年にインディアナ大学から出ているほどで、その出典として相当な量の書物を記す。おそらくそれなりの採集資料があるのではなからうか。

「古屋の漏り」の中国の口承例については四四例あげているが、小林恭子氏の論文を紹介しつつ、小林氏とは別の視点で整理、分析をしている。それは「古屋の漏り」を前半と後半に分けて考察すること、前半部で終われば「逃走型」、後半部まで語れば「騒動型」となり、前半部は日本と同じで、後半部の話の展開に違いがあ

るといふ。さらに日本によくある猿の尻尾の由来を語る話が中国にないと指摘する。

第四章の「小鳥前生譚」は日本における研究論文が多いためか、論点の絞り方がこれまでの三章と異なる。中国の小鳥前生譚については一五五の類話を「兄弟葛藤」(二四)「親子の葛藤」(六)「継母との葛藤」(二七)「嫁ぎ先(夫・姑・小姑)との葛藤」(五五)「地主・金持ち・権力者との葛藤」(三九)「農作業もしくは仕事の失敗」(二〇)「その他」(四)に分けて整理している。「小鳥前生譚」は人が死んで小鳥になった話が束になったものなので、話型としての比較はしにくい。そこでこのような分類で終わっているのだが、これについてはさらなる考察が必要であろう。

たとえば、氏の分類で「兄弟葛藤」とされる中に、日本全国で語られている「時鳥と兄弟」の類話があり、中国では少数民族地区にのみ一〇話ほど伝承されていることは、評者も確認しているところで、話型による比較考察だけでいえば、この点をもっとも興味深いと思うのだが、氏の論点

とは異なるのでこれ以上触れない。

四、民俗からの視点

立石氏は「終章」で「昔話を収集・整理・分析し、その話を支えている民俗に目を配りつつ、話や伝承の特徴を探るのが昔話の比較研究の方法」だとしており、その通り各話に民俗の視点を入れていて、それが氏の論を興味深いものになっている。

「猿の生き肝」では「第四節 肝を食す習俗について」で、日本における肝の受容を『本草綱目啓蒙』などを紹介して、話の伝播の背景となった人々の意識に配慮している。「鼠の嫁入り」でも「第四節」で背景としての民俗に注目しており、永尾龍造『支那民俗誌』などから年中行事の「鼠の嫁入り」を紹介し、昔話と年中行事、「鼠の嫁入り」の年画、さらには「逼鼠蚕猫」という養蚕農家の鼠よけの絵を問題として、前述の「県官画虎」の話や六話確認しつつ、考察を進めている。昔話や民間故事に伝承された土地の民俗が大なり小な

り反映するのは当然のことで、説話の型の分析だけでなく、こうした民俗に注目することで説話の伝承の有り方がみえてくるというものだ。

「古屋の漏り」に対する民俗は、中国では「雨漏りが怖い」という以外に「鍋が漏るのが怖い」と語るものがあり、雨の降らない地区では雨漏りは実感に乏しいわけ、鍋が漏る話に変化したとする。それだけでなく、「古屋の漏り」に関連する諺・格言にまで調査の手を伸ばす。それは大島建彦氏の論文で、日本では「古屋の漏り」の話が「虎狼より漏るぞ恐ろし」という諺に支えられて広まったということ、中国でも同じことがいえるかという検証をしたわけで、中国の「古屋の漏り」の四一例と、『中国諺語集成』（三套集成の一）の上海、江蘇、湖南のものから三〇例抜き出して、中国には「虎は怖くない、雨漏りが怖い」という諺は一例しかなく、「〇〇は怖くないが、〇〇は怖い」という表現形式の諺を借りているだけだと跡付ける。したがって、中国の「古屋の漏り」は「雨漏

り、鍋の漏り」はとても厄介だという意識に支えられて伝播したと結論する。

「小鳥前生譚」の比較研究はその諺との関係を中心として論を展開する。『中国諺語集成』『中華諺語誌』などから中国各地の諺を一五三例抜き出しているが、これらの諺と民間故事が具体的に結びついていわけではないので、鳥に対する関心が共通しているという確認に終わっている。ただ、これも民間説話を話の分析だけに終わるのでなく、民俗意識にまで踏み込んだ視点を持つている点で貴重であり、今後の展開が期待される。

第五章の貴州省トン族のフィールドワークでは「第三節 民間説話に影響を与えた民俗の一考察」がある。『中国民話の旅』（三弥井書店）に収録した竜宮女房型の話に、「蛇の精霊」「ランホウ」「スーメイ」と題された話があり、その中に竜宮から竜王の娘をもらう部分がある。その際、竜王から傘をもらってくることになっている。これを立石氏は貴州省における傘にまつわる民俗で解いている。

トン族の集落には鼓樓と祖母堂という建物がある。評者もこれに注目したことがある（『日中説話の比較研究』第十二

章 侗族の祖靈觀と鼓樓）が、その祖母堂（薩歳という）の土饅頭形のものに必ず傘がさしてある。さらにトン族では結婚式で花嫁を迎える際に、花かごのかわりに傘を持つ民俗があるという。その傘は道中、何があっても開いてはいけなさとされ、これがトン族の昔話に取り込まれたとする。傘に関する民俗調査がなされていなくては解けないわけで、貴重な視点である。

第六章の日本の山姥と中国の変婆の比較も、貴州省岩洞の民間故事調査での成果をもととする。そこで採集された「変婆の話」「ノミとシラミの話」と、他書からの変婆の話を示し、変婆の俗信（これもフィールドワークで調査したもの）や世間話に注目しつつ、日本の山姥と比較している。変婆の話は中国に広く分布する虎婆（狼外婆型故事）に属するものだが、話型に注目して類話を集めるのではなく、その民俗的背景に注目して日本の山姥と比較し

たところが面白い。モチーフ研究の方向を示したものといえよう。

立石展大氏は、故野村純一氏の昔話・民間説話を民俗の中の伝承される場において考えようとする方法を、中国の民間故事との比較において考察しようとしている。本書で論じたいくつかの民間故事の分析は興味深いものがあり、日中の比較説話学に新しい足跡を刻んだものといえよう。特に中国で民間故事収集が三套集成という形で完結したことにより、中国全土の説話伝承の姿が明らかになった今、それを駆使したこのような著書が刊行されたことは喜ばしいかぎりであり、その分析が書承による文献比較だけではみえてこないものがあるのだということを示している。人と人の交流はいつの時代でも絶えずあり、そのことを意識して説話を考えていかななくてはいけないことを教えてくれる好著である。

二〇一三年三月 汲古書院刊

一〇、〇〇〇円＋税

（しげはら・ひろし／常葉大学短期大学部）